

もみぢ葉に衣の色はまみにけり秋の山からめぐりこしまに

〔新撰六帖〕六くろみ

光俊

山がらのまはすくるみのかくにもちあつかふは心なりけり

〔夫木和歌抄山陵〕二十七 十題百首

寂蓮法師

この内も猶うらやまし山がらのみのほどかくすゆふがほのやど

○按ズルニ、平家物語山門御幸ノ條ニハ、此歌ヲ紀伊守範光ノ作トナセドモ、恐ラクハ誤ナラ

シ

〔古今著聞集〕十一 成通卿いまだ若かりけるに、庭にて鞠をあげられけるが、まり格子と簾との中

に入けるに、つゞきて飛入られけるが、父の前無骨なりければ、まりを足にのせて、其板敷をふま

ずして、山がらのもどりうつやうに飛かへられたりける、凡夫のまわざにあらざりけり、

〔吾妻鏡〕三十九 寶治二年十月廿五日戊戌、島津豊後左衛門尉忠綱、以高麗山（山柄）獻將軍家、（頼原）

其色白而如雪、其聲不相似吾國鳥、幕府賞翫只此事也、

〔太平記〕十七 還幸供奉人々被禁殺事

宇都宮ハ放召人ノ如ニテ、逃ヌベキ隙モ多カリケレ共、出家ノ體ニ成テ徒ニ向居タリケルヲ、惡

シト思フ者ヤ爲タリケン、門ノ扉ニ山雀ヲ繪書キ、其下ニ一首ノ歌ヲゾ書タリケル、

山ガラガサノミモドリヲウツノミヤ都ニ入テ出モヤラヌハ

〔續近世畸人傳〕高戸善七

備中國鴨方村に、高戸善七郎後に孫兵衛といへるは、父に仕ふること極て孝也、（中略）老後人の飼

たる山雀の翅を殺たるを憐み、乞得て愛養し、翅長するに及び、籠を開きて去しめんとするにさ

らず、程なく翁京へのぼらんとて、家より一里計出たる、竹輿のうちにて頓死しければ、家にかへ